

## ダンゴ虫・カタツムリと遊ぼう<3歳児>

### 愛知県刈谷市立住吉幼稚園

**仮説** 幼児の発達や興味関心を押さえ、心を揺り動かすような自然環境（身近な小動物）に触れ合わせることで、いろいろな発見をしたり好奇心をもったりするだろう。

#### <教師の願い>

一部の幼児は大きな木や垣根が多い園庭でアリや幼虫などを見つけてくる。そして、見つけたり触ったりしたことを教師に伝えようとする。一部の幼児だけでなく他の幼児にも小動物に興味がもてるようになり、その中でいろいろな変化に気付いたり発見したりしながら自己発揮をして欲しいと思った。そのためには体が丸くなったりするのが伸びたりするような動きの変化が一目で分かるものが、幼児にとって興味がわきやすいのではないかと思い、ダンゴ虫とカタツムリに焦点をあてた。

#### 一記録1 「ダンゴ虫と遊ぼう」－6月中旬

教師と一緒にダンゴ虫探しを楽しむA児とB児。捕ったダンゴ虫をクラスの飼育ケースに入れたり「これは僕のね」とビニール袋に入れたりしてうれしそうに持っていた。しかし、しばらくすると飼育ケースもビニール袋も園庭に置いたまま忘れていることが多かった。興味をもつようだがその後は関心がないようだった。そこで教師は一人一つずつ飼育ケースがあればダンゴ虫を身近に感じられるのではと思い廃材(ペットボトル)で飼育ケースを作ることにした。教師が作ったペットボトルの飼育ケースを「プレゼントだよ」と子どもたちに渡すと「うわー！」「僕のなの？」とうれしそうな表情を見せた。A児は「何をするやつ？」と聞くので「この中に捕まえた虫を入れるの。虫かごだよ」と伝えた。A児とB児はうれしくて「ダンゴ虫探しに行ってきまーす」と勢いよく飛び出して行った。「見つけた！」「どこにいた？」「ここだよ」と会話を交わしながら見つけたダンゴ虫を大事そうにケースに入れていた。

次の日、より身近に感じられダンゴ虫と触れ合えるように、飼育コーナーに白い浅めの大き目の箱を用意しておいた。登園して来たB児は「この箱何？」と教師に聞く。

「ダンゴ虫の公園だよ」と言うと「じゃあ、ここにダンゴ虫を出してもいいの？」と早速箱の上に自分の飼育ケースからたくさん出して「並んで歩いてるよ」「行進してるみたい！」とダンゴ虫の姿を喜んで見ていた。少しでも興味をもってダンゴ虫に触れて欲しいと思い、教師が指でダンゴ虫を転がした。「あっ！丸くなった」「見て！裏返しになって足が動いてる」「元に戻れないんじゃない」とさらに動きを楽しみ自分でもダンゴ虫を転がし、ダンゴ虫の姿の変化を楽しんでいる。教師は指の上を歩かせたり、手の平に乗せたりした。それを見ていたA児とB児は同じように手の上に乗せた。「うわー！足がいっぱいあるよ」「くすぐったい。もじもじしてる」「ほんとだあ！」「前はこっち？」と実際に触れ、発見したことを言葉でも表現していた。その後も手の平だけでなく腕にはわせ触れ合う姿があった。

#### <考察>

- ・一人一つずつの飼育ケースを用意したことで「飼育ケースも自分の物」「ダンゴ虫も自分の物」という気持ちが強まり、あまり関心がもてなかつた幼児もダンゴ虫探しをするようになり今まで以上に楽しめるようになった。また、自分の物になったことでより身近に感じられ触ったり近くで見たりすることを楽しむようになった。
- ・手で触れられるように環境を用意したり、教師がダンゴ虫に触れて遊んでみる姿を見せたりすることで、子どもたちに刺激を与えることができた。そのため、探すだけでは気付かなかつたことを発見し、何度も触ってみたり、驚いたり、肌で感じたりすることができた。



ペットボトルの飼育ケース

#### 「並んで歩いてるよ」「行進してるみたい！」



## ー記録2「カタツムリと遊ぼう」ー6月下旬

ダンゴ虫と触れ合いながら遊びを楽しんでいる頃、クラスのC児がカタツムリを30匹ほど捕まえ幼稚園に持ってきた。新しい小動物に興味をもったA児は、C児に「カタツムリ僕にもちょうだい」と聞いている。A児やC児は、持ってきた虫かごから自分のペットボトルの飼育ケースにうれしそうにカタツムリを移し変えていた。

自分の飼育ケースに入れたカタツムリと触れ合えたり特徴に気付くように、教師は発砲スチロールの板やかまぼこの板・枝を用意した。ダンゴ虫の時と同様カタツムリにも公園ができたので、幼児は飼育ケースからカタツムリを出して歩かせていた。教師は楽しい雰囲気を作るため『カタツムリ』の歌を歌った。そばにいたD児も教師と一緒に歌い始め「つのはこれ?」「やりはこれ?」と疑問をもちながら指差しをした。指した指がカタツムリに触れカタツムリのつのは一瞬で引っ込んだ。それを見たD児は「うわっ!なくなった」と喜んだ。教師も「ほんとだ。今指がカタツムリに触ったからかな?」と思いを共感した。するとD児も周りで見ていた幼児も何度も何度もカタツムリを触っていた。A児は「わー!木の上を歩いてるよ。坂道にしちゃお!」と枝を立てた。すると「あれ?」と言ふ。今度は枝を逆さにして「先生!逆さまにしたのにカタツムリ落ちないよ。すごい!!!」と驚きを隠せない様子だ。D児は何度も枝を逆さまにしてはカタツムリの様子に驚いていた。

教師はカタツムリの糞の色を楽しめるように、ニンジン・キャベツの色がわかりやすいえさを用意しておいた。遊び終わったD児は「ごはんだよ」と自分の飼育ケースに入れる。給食後、穴が開いているニンジンを見つけ「先生、カタツムリがニンジンをいっぱい食べてるよ」とうれしそうである。次の日登園して来たD児は「先生これ何?」と何か発見したようだ。「何だろう。昨日ご飯いっぱい食べたからウンチかな?」と教師が言うと「だってオレンジ色じゃん」と色に驚いているようだった。教師も驚いて「昨日ニンジンを食べたからオレンジ色なのかな?」と言うと「そうかも」と目を輝かせていた。その後も「こっちは緑じゃん」と違いを発見し驚いているようだった。

<考察>

- ・以前ダンゴ虫と十分触れ合える場を設けたことで小動物に親しみをもつことを覚え、新たなカタツムリにも興味をもち親しみやすかった。
- ・カタツムリの特性を生かして、棒を置いたり板を置いたりして環境作りをしたことや、実際に触れたり遊んだりしたことで、カタツムリの体の変化に気づいたり、棒を逆さまにしても落ちないことに気づき感動することができた。
- ・色がわかりやすいニンジン・キャベツを用意したことで、子どもも糞の色を発見しやすかった。発見の一つとして、3歳児でも一目で分かる糞の色をとり上げてみたことは良かった。

**まとめ**

- ・ダンゴ虫やカタツムリのように動きが分かりやすい小動物は、子どもたちにとって目をひきやすかったようだ。そのため興味関心や親しみがもて、触れて遊ぶきっかけになった。丸まったり縮んだりするような、思わず触れたくなる小動物を用意したことは、3歳児の教材としてとてもよかつた。
- ・興味をもった小動物をより身近なものにするために、一人一つずつの飼育ケースを用意した。『自分の物』ということで愛着がわき「よく見てみよう」という気持ちになったり新たな発見ができたりした。またその小動物の特徴にあった環境の再構成や教師の援助によって「どうしてかな」「面白いな」などと、より愛着がわいたり興味関心が広がったりしていくのだと思った。

**ポイント**

教師が仮説や願いを明確にすることで、具体的な指導の手立てを持つことができ、的確に評価することにもつながっています。興味の対象にする身近な生き物を、動きや変化のあるダンゴ虫やカタツムリにするという選択をしたり、ペットボトルの飼育ケースや色の違う野菜の餌など教材を工夫したりすることで、教師が意図した環境にかかる幼児の豊かな体験や変容を捉えることができました。豊かな会話や気付いたことの情報交換など、3歳児なりにかかる方も豊かになっています。

「つのはこれ?」「やりはこれ?」

